戦争前後の歩み

城戸きみよ（咲が丘・78歳）

昭和十七、八年迄は、戦争は外国でやるものと思っておりました。すると、其の内に本土へ上陸するようになるから、爆弾や硝煙弾が投下された時に消す訓練を御上からの命令で、どんな多忙な時でも一日一回町会長の指示で、隣組全員集ってバケツへ砂や水を入れて「リレー式」にやり爆弾、硝煙弾投下の時に目指して掛けるようにとのこと、又、敵軍上陸した時には、竹槍で突く訓練もしました。其の時は真剣でした。

十九年に入り、敵偵察機は飛んでくる、私達も本郷より赤坂へ引越し。木下助産院でお手伝いをする。子供は女中さんが見てくれるので、心配なく赤坂、六本木、白金町迄でお産に廻り歩く。

その頃は、食べる物もなく、配給だけではお腹いっぱい食べることはできませんので、子供を連れて、埼玉の方へ買い出しに行き、芋や野菜を買って来て食べる。

主人と主人の弟三人、私の弟一人、海軍二人陸軍三人外地へ行っておりました。

日、一日と戦争が激しさを増してきた。二月、警戒警報の鳴る真最中に、陣痛発作の産婦をおぶって防空壕へ入り、蠟燭の明かりで分娩をさせ、母子供に異常なくほっと胸をなで下しました。

夜になると、敵B29は二〇〇機、五〇〇機編隊で空中にあらわれるので、履物のまま家へ入ったり出たりでした。

東京も危険になったので、学童、妊産婦、老人皆疎開させることになり、職場で働く人と統後の守りは残りました。

十九年の十二月最初空襲は深川でした。そのとき私達は、救護班のトラックで被災地を廻りましたが、手当ての出来るような人は、一人もおりません。死体は、ばたばた倒れておるのを兵隊達が、大きな「フォーク」の様な物で持ち上げ、「トラック」に投げ込み、行き何処かに埋めると思いました。

それから二十年になりましたら、毎晩のように致る処は空襲で焼かれ、四月頃は静岡、神奈川、千葉、埼玉にも爆弾、硝煙弾は投下されるようになり、妹が私と同居しておるのは、軍属として東芝電気の看護婦で、夜勤の時に防空壕の中で直撃を受け即死。同じ年の五月二十五日、私も空襲で焼け出されてしまい、その時は、東京一面に火の海となり、逃げ場もなく、虎の門地下鉄入口に子供とすくんでいると、夜が明けやっと罹災証明とカンパン一人に一ッづつ頂いて、おぶって手を引いて上野迄歩き、後を見ると、家は一家も無く、焼け野原にあるのは、風呂屋の煙突だけ、淋しいもんでした。

駅で切符を買うのに十五時間も子供と坐り、切符を買って、郷里の秋田

へと出発。途中、児玉郡のお友達の実家へ、衣類を少々頼んであるのを、頂きに寄って、お母さんより「おにぎり」二十個作って頂き、五個は手下げ袋に入れ、十五個は「リュックサック」に付け、本庄駅から高崎迄行くと、線路は切断されて明朝まで行かないとのことで、「リュック」へ子供を坐らせていると、突き落とされて泣いているが、「マッチ」一本付けて見る事も出来ず、荷物盗難にあい、おにぎりはないので困りました

上野より、十二時間で行く所、途中、四回も汽車は止まり、三日間もかかりやっと大曲町のおばさんの所に下車、父は、迎えに来て三日も見えないから死んだ者と思い、お米を置いて、今帰ったところと言って、御飯を炊いて食べさせてくれました。子供は喜んで「こんな美味しい御飯は、食べた事はないね。」と今でも時々話題となります。

それから、生保内線に乗り換え角館より三十二キロ間、「トラック」に乗せて頂き、檜木内村生家へ、奇跡的に無事で帰ったとき、母は涙ながらに「よく生きて帰られたね。何が無くても、身体があっての事だから。」と言って、喜こんで迎えてくれました。

私は、どんなことがあっても、妹の遺骨と子供は離さず一緒でした。妹の遺骨を母に渡し、「律子、母さんだよ。抱かれなさい。」と言った。それから、主人の弟達、私の弟、次々に戦死の公報が入ってくる。

主人は、終戦間近の七月二十五日に、功績高い第四海防護衛艦ですから、必ず残ると言っておりましたが、帰国途中八時間、武器は無く敵機にねらわれて来て、鳥羽港へ錨下ろさんとしたときに轟沈され、艦底にいた十人程の無傷者はボートを下ろして、危篤状態の人五人程が鳥羽日赤病院へ運びこまれ、後、横須賀海軍病院へ護送されて、外傷は大体治りましたが、小さな弾片が血液に入って全身を廻り、心臓に入ると発作となるのです。治療の方法がないといわれたとき、一年でも子供と一緒に暮らしたいと本人の希望で、海軍病院から秋田の寒い所へ護送され、一日に「リンゲル(ブドウ糖)」を両大腿部に三本ずつ毎日やって、だんだん針の入るところは無くなりました。

病院から護送されて、三年目に亡くなりました。

東京生まれの東京育ちの主人の寒い北国病む身体を見て、冬三回過ごし働かなければなりませんし、夜休む間は、ありませんでした。

木炭では、室を暖める事は出来ませんでしたが、薪は買えないから、お湯を沸して湯タンポを作るほかありませんので、主人には三個も入れて寝かせ、寝ている病人も辛い事でしたが、看護の私も大変でした。

夜、お産で外へ出ると、厳しい寒さのため上瞼と下瞼と凍りつき、又、口に掛けている「マスク」も凍りついてしまうほどの寒さ、手袋をして歩いても、手は凍傷にもなりました。

私の疎開した片田舎は、秋田県仙北郡檜木内村と言うところで、奥羽山脈の山懐にあり、四方山に囲まれた小さな村で、半年以上も雪の中で生活しなければなりませんでした。当時は、雪の降る量も多く、一晩で一メートル以上積もること度々ありました。

村役場で、保健婦、助産婦、やってくれと言われましても、この雪深い山の中で保健婦、助産婦やることは、大変に勇気が必要でした。しかし、病身の夫を看護しながら三児を育てるために、町から遠く離れた、無医村の村人に喜んでもらえるのならと思い、この村で働いて行くことにしました。

男子三人で一室貸りて、暮らす事は出来ませんので、姉の家の納屋を改造して入れて頂いて、三児を育てる事は出来ました。

二十年、初めての冬は、私には何一つ冬仕度はなく、零下三〇度以上の毎日です。

十一月から三月頃迄は、一食無くも燃料が無くては生活出来ません。木炭は買えますが、薪は買う事は出来ません。当地の人達は、今年焚く薪は昨年切って、乾燥した物を焚いております。木炭を買って「イロリ」で焚き、お湯を沸かして「湯タンポ」を入れて、子供達を寝かせて仕事に行き、母と姉は時々見に来てくれました。大根や白菜を買って家の中に置いて、朝に凍って包丁は立ちませんでした。

その頃は電気もなく「ランプ」で、石油は配給、明かりを取っておりましたが、私にはそれもなく、子供達と寒い時は「湯タンポ」を布団に入れ、約束して、来年は皆さんと一緒に出来ますからと言いました。

十一月に入りましたら、寒さは一層厳しくなり、お産は猛吹雪の時に多く零下四十五度になり、星が降るような青空の時は必らず始まるのです。昼は保健婦の仕事、夜はお産の仕事で、どうにか生活をして参りました。

大雪で、地吹雪、猛吹雪とも言いますが、そんな時には降る雪で、一寸先の人は見えません。頭に乗った雪は重いので、手ではらいながら歩き、地吹雪で大雪の時は、往来全面ストップの時でも、お産は待ってもらえないのです。妊娠十か月間、一回も診察を受けない方ばかりですので、お産のある度ごと道々異常ないようにと祈りつつ歩き、自分の生命の危険さえも感じる、二十一年の二月のことでした。

その日は記録的な大雪が降り、屋根が雪の重さで「ビシッ、ビシッ」と鳴り、なかなか寝つかれない夜でした。その時、外で「起きてくれ、起きてくれ。」と大声で叫んでいるのが聞こえるので、玄関を開けて外を見るとそこには、雪と寒さで体中が真っ白になったおじいさんが立っていました。家の嫁のお産が始まりそうなので、一緒にきてくれとのことでした。しかし、強い北風を伴った大雪が降って、地吹雪なので出来ることなら断わりたいと思いましたが、迎えに来たおじいさんや、待っている産婦、家族のことを思い断わり切れず、このおじいさんが歩くなら私も歩けないことはないと思い、勇気を奮い起こして一緒に出掛けることにして、おじいさんは「カンジキ」を履いて前を歩き、私は長靴をはいて後から歩いて行き、更に腰や胸のあたりまで雪の中に潜ってしまい、歩くというより雪の中を泳いでいるという感じでした。

約六キロの道程を四時間ほどかかって、やっと産婦のところに辿り着いたが、すでに激しい陣痛となっているので、濡れたズボンを乾かす暇もなく内診してみると、臀位で胎便が出ていて急いで色々考案しておばあさんに支えてもらって、やっとの思いで、男の子を出産させることができました。母子共に元気で、ホッと胸をなで下ろしました。洗面器に消毒液と熱湯を入れておいても、わずか十分たらずで凍ってしまうのでした。

仕事を全部終えてはじめて、はいているズボンが氷って「カチカチ。」音がするのに気が付きました。冬になると、その繰り返しでした。今でも、目に焼き付いているので忘れられません。大雪で猛吹雪の時に、病人が出た時に隣り部落からも頼む事も時々ありました。箱橇へ病人を乗せて、前を雪踏む人十人、箱橇の先を引く人を八人、後を押す人を三人で、三十二キロの道程を行くのですから、病院へ着かぬうち亡くなる人も何人かおりました。私もそんなことにならぬうちに出て行きたいと思いました。二十二、三年頃は、お産が多く復員後ですからね。

二十二年一月頃、夕方お産があって出掛けると、そこのお産が終わると又、その家へ外の家から迎えにくるので、自分の家に帰らず、一晩で七軒

も廻る程の事もありますので、自分の身体の事も考えました。

村は貧しいので、冬になると皆出稼ぎに出るので、老人、女と子供だけで、お金も無くお産料はお礼として、お米や大豆や小豆で、中には一銭も無い人が何人もおりました。

二十七年頃より、受胎調節の指導員として、自転車へ「スライド」を付けて村から村へと廻り歩るき、又、予防注射の時は、本校と分校の二ケ所、山の上へ行く時は麓(ふもと)まで自転車で行き、後ろの「リュックサック」に入れて背中にしょって老先生と二人で山を昇り、私が準備する迄分校の先生と碁並べでした。時には私一人で注射する事もありました。

四月から十月頃迄は、気候も良く、山は春は花、秋は紅葉ですが、子供の教育にはお金が無くては出来ませんので、長男は町へ下宿させ、北高卒業後上京させ、次男は茅が崎のお友達へお願いして、平塚高校へ入学させて、隣部落の助産婦さんへ後全部お願い致しまして、十六年間の寒い北国での村人達のお産や、健康管理のお手伝い、育児に追われ、自分を顧(かえり)みる間もなく、無我夢中でやって参りました。

村の人達や妊産婦さん方に「行かないで下さい。」と言われまして後ろ髪を引かれる思いで、三十五年十二月二十日に三男と出て参りました。茅が崎のお友達の所で三十六年のお正月を迎える事が出来ました。後、病院勤務をして、子供達をどうにか一人前に育てました。

現在は、孫六人、曾孫一人になりました。病院退職後、保健所の依頼にて現在もやらせて頂いております。

多趣味の私は、今迄に出来なかった事を残り少ない時間で思う存分使い、何事も気力を持って、独身時代に返った気持ちで、楽しく老いていくことをお祈りしている次第でございます。今は、若い時の苦労は何も残っておりません。

今後、戦争には絶対反対です。

檜木内村四十年前とは全く違って降る雪も少なく、寒さも弱く国道も通り一昨年より二両編成の列車も通る様になりました。